

# 大学進学時における 運動部非継続の要因

滝 豊 樹 姫 野 修  
田 村 義 清 池 辺 重 雄

## I. 緒 言

スポーツの社会化が進み、広く一般大衆の関心も高い。そんな中で、学校体育の運動部活動は青少年のスポーツ活動の大部分をしめているといえるだろう。しかし、中学校・高校の運動部においては、学校教育との関わり等においてさまざまな問題が生じ、数多くの提言がなされている。また、青少年のスポーツ活動としては、スポーツ少年団から中学校の運動部、そして高校、大学といったそれぞれ違った集団での活動を余儀なくされている。そこで、これらの問題について、それぞれの集団への参加や中途での退部行動だけでなく、一連のつながりとして捉えることも必要になろう。この、活動の継続という視点から運動部を捉えた研究は少ない。佐伯<sup>4)</sup>が文部省実施（1987年10月）の「運動部活動状況調査」の概要を紹介したところによると、運動部への所属率は、中学校66.9%（男子74.7%，女子58.6%），高校40.8%（男子48.0%，女子33.0%）である。中学校から高校への節目でもかなりの減少がみられる。

本研究では、高校から大学という節目に注目した。そして、高校時代は運動部に所属していた者のうち、大学進学後も継続して活動をしている者と活動をやめてしまった者との比較を中心に、非継続の要因を明らかにしようとした。

## Ⅱ．方 法

### 1．調査対象者と方法

私立D大学1年生男子学生531名を調査対象とした。対象者の高校および大学進学後における運動部所属状況を表1に示した。調査対象者のうち、高校時代運動部に所属しており進学後も運動部に所属している者を継続群、高校時代は運動部に所属していたが大学進学後は所属していない者を非継続群とした。

調査は質問紙法により、保健体育講義の授業時に実施した。調査時期は、1987年5月下旬から6月上旬である。

表 1 調査対象者の高校時代および大学進学後における運動部所属状況

		高校時代の運動部所属状況			合 計
		所属していた	所属していなかった	途中退部	
大運動部進学後所属状況	所属していない	136(非継続群)	212	71	419
	所属していたが辞めた	5	3	2	10
	今から所属するつもり	2	0	1	3
	まだ迷っている	16	6	6	28
	所属している	57(継続群)	5	9	71
合 計		216	226	89	531

### 2．調査項目の内容

(1) 徳永ら<sup>6)</sup>がスポーツ行動を予測することができると指摘したスポーツに対する態度、スポーツの効果に対する信念、および規範信念に関する項目と、多々納ら<sup>5)</sup>が指摘した過去のスポーツ条件、現在のスポーツ条件、およびスポーツに対する重要な他者に関する項目についての調査を実施した。これらの質問項目には、徳永ら<sup>7)</sup>の作成した「スポーツ行動診断検査」を用い、



の4件法とした。なお、過去のスポーツ条件として高校時代についての項目を

追加した。

(2) 非継続群に対しては、非継続の原因について質問した。原因は、第1原因、第2原因の2つを24の項目から選ばせた。身体的・技術的要因、気力的要因、他目的的要因、集団的要因、経済的要因の5要因22項目とその他2項目である。これらは、井田ら<sup>1)</sup>の5要因11項目を参考にした。

### Ⅲ. 結 果 と 考 察

#### 1. 大学進学時における運動部非継続の実態

表1に示したとおり、調査対象者531名中40.7%にあたる216名が、高校時代運動部に所属していた。前述の佐伯<sup>4)</sup>の報告とほぼ同程度と思われる。一方、大学進学後は、13.4%に減少している。多々納ら<sup>5)</sup>の報告では、27.6%が所属しており、本調査の方が小さい値を示した。また、継続・非継続という視点では、高校時代運動部に所属していた216名のうち26.4%にあたる57名しか継続していない。3割に満たない値である。

#### 2. 継続群と非継続群の比較

##### (1) スポーツに対する意識について

表2に、スポーツに対する態度、スポーツの効果に対する信念、および規範信念に関する質問項目の両群の平均値と差の検定値(t)を示した。快感情、不安感情、心理的效果、社会的効果に関する項目では両群間に有意な差は認められず、ほぼ同様な傾向であった。身体的効果に関する項目では、「ぐっすり眠るのに役立つ」「ふとりすぎの予防になる」の2項目について、非継続群が有意に小さい値を示した。継続群、非継続群ともに高校時代は運動部に所属しており、さらには中学校以前における所属も予想される。つまり、高校時代までの運動部活動をとおして、両群共にほぼ同様なスポーツに対する態度、スポーツの効果に対する信念が形成されたことは十分に考えられることである。

規範信念に関する項目では、少なくとも2週間以内にスポーツをすることを

表 2 スポーツに対する意識の項目別平均値と両群の比較

項 目		継続群	非継続群	t
快 感 情	スポーツの後は満足感が得られるだろう	1.895	1.904	0.079
	考えるだけでうきうきした気持ちになる	2.526	2.489	0.354
	楽しいことがあるにちがいない	2.263	2.148	1.024
	スポーツの後はこころよい気持ちになるだろう	1.965	1.948	0.149
不 安 感 情	なんとなく心配でおちついていられない	3.053	3.185	1.268
	みじめなことにあいそうな気がする	3.263	3.378	1.157
	はずかしいことがおこりそうな気がする	3.123	3.178	0.518
	こわいめにあいそうな気がする	3.456	3.496	0.432
心 理 的 効 果	忍耐力の強い性格になる	1.804	1.791	0.108
	競争する楽しさを味わうことができる	2.071	2.082	0.086
	将来、役に立つ特技が得られる	2.018	1.985	0.255
	自分の可能性（実力や限界）をためすことになる	1.786	1.754	0.304
	自分の能力を他人に認めてもらえる	2.196	2.261	0.517
社 会 的 効 果	思いやりのある協力的な性格になる	2.089	2.097	0.069
	グループの連帯感（むすびつき）が増す	1.786	1.754	0.297
	エチケットやマナーがよくなる	1.839	1.985	1.235
	毎日の生活が生き生きとし、充実したものになる	2.268	2.261	0.054
	明るい性格になる	2.161	2.187	0.200
身 体 的 効 果	胃や腸の調子がよくなる	2.536	2.440	0.767
	ぐっすり眠るのに役立つ	2.250	1.925	2.670**
	すばやい動きができるようになる	1.964	2.000	0.318
	からだのよふんな脂肪がとれる	2.196	2.000	1.608
	ふとりすぎの予防になる	2.554	2.224	2.444*
規 範 信 念	家族が期待している	2.537	2.740	1.537
	友人が期待している	2.815	3.206	3.498***
	地域の人々が期待している	2.963	3.321	2.956**

\*\*\* P&lt;.001 \*\* P&lt;.01 \* P&lt;.05

「友人が期待している」「地域の人々が期待している」において、それぞれ 0.1%, 1%水準で有意な差が認められた。非継続群に比べて継続群の方が友人や地域の人々の期待に対する信念が強い傾向を示している。ここでいう地域

の人々とは、高校時代の先生とも考えることができる。徳永ら<sup>7)</sup>は、スポーツ行動を高い確率で予測できるのはスポーツへの行動意図であり、その行動意図を規定する変数として規範信念が最も高いとしている。高校時代まで同様に運動部に所属していた者のスポーツ意識のうち、規範信念の違いが、大学進学後の運動部継続に影響を与えているようである。中でも特に、友人や地域の人々の影響が強いと思われる。一方、家族の期待についての有意差は認められなかった。

## (2) スポーツ条件、重要な他者について

表3に、スポーツ条件および重要な他者に関する項目の両群の平均値と差の検定値(t)を示した。現在のスポーツ条件に関する全ての項目については、継続群の方が0.1%水準で有意に小さい値を示している。非継続群に比べて継続群は、スポーツ条件に恵まれているとしているのである。継続群は現在運動部に所属し、非継続群は所属していないことから、金崎ら<sup>2)</sup>と同様の結果といえる。また多々納ら<sup>5)</sup>は、スポーツクラブ所属をはじめとする全ての外的基準に対して現在のスポーツ条件は、著しく高い相関を示すことを報告している。

一方、子供のころのスポーツ条件、高校時代のスポーツ条件に関する項目では、前者の「時間を十分にとることができた」と後者の「場所や施設に恵まれていた」「時間を十分にとることができた」において有意差が認められた。それらの値は非継続群の方が小さい値であり、継続群よりも恵まれていたという意識を示している。他の項目についても同じ傾向がみられる。この結果は、過去のスポーツ条件に恵まれていた者が必ずしも現在のスポーツ行動に結びつかないことを示唆している。しかし、本研究におけるスポーツ行動は大学での運動部所属に限定されており、近年の多様なスポーツ行動に対応できているとは言い難いことも確かである。むしろ注目すべきことは、「時間を十分にとることができた」について子供のころと高校時代ともに有意差が認められたことであろう。これは、最近青少年のスポーツ現場で問題にされている「バーンアウト現象」との関連が予想できる。つまり、非継続群ではそれまでのスポーツ実施が量的に多大なものであったと意識し、そのことが「時間」には恵まれてい

表 3 スポーツ条件および重要な他者の項目別平均値と両群の比較

項 目		継続群	非継続群	t
子供のころのスポーツ条件	場所や施設に恵まれていた	2.278	2.061	1.726
	クラブ・グループ・友人に恵まれていた	2.019	1.763	1.927
	指導者に恵まれていた	2.556	2.473	0.525
	時間を十分にとることができた	2.111	1.802	2.382*
	チャンス（行事・大会・機会）に恵まれていた	2.074	1.992	0.617
高校時代のスポーツ条件	場所や施設に恵まれていた	2.259	1.977	2.109*
	クラブ・グループ・友人に恵まれていた	1.593	1.542	0.447
	指導者に恵まれていた	2.019	2.191	1.128
	時間を十分にとることができた	2.074	1.656	3.147**
	チャンス（行事・大会・機会）に恵まれていた	1.870	1.779	0.736
現在のスポーツ条件	場所や施設に恵まれている	2.185	2.740	5.352***
	クラブ・グループ・友人に恵まれている	1.704	3.053	11.653***
	指導者に恵まれている	2.278	3.290	7.869***
	時間を十分にとることができる	1.852	2.962	10.274***
	チャンス（行事・大会・機会）に恵まれている	2.019	3.237	11.347***
重要な他者	父が熱心だ	2.481	2.466	0.105
	母が熱心だ	2.741	2.824	0.757
	家族にすすめられる	2.333	2.603	1.864
	親しい友人や先輩にすすめられる	2.315	2.947	4.494***
	地域の人々にすすめられる	2.759	3.351	4.862***

\*\*\* P&lt;.001 \*\* P&lt;.01 \* P&lt;.05

たとさせているのではないかということである。このことについては、過去における実際の練習頻度および量を知ることが課題となる。

重要な他者に関する項目では、「親しい友人や先輩にすすめられる」と「地域の人々にすすめられる」の2項目において有意差が認められ、ともに継続群が小さい値を示した。つまり、非継続群に比べて継続群の方が、それらの他者からの勧めを強く受けているのである。多々納ら<sup>4)</sup>、糸野ら<sup>6)</sup>も大学生のスポーツ参与には友人の励ましが大きな影響力をもつと報告している。一方、父、母、家族についての項目では有意差が認められなかった。これらは、規範信念

に関する項目の結果とも一致する。したがって、運動部に所属するというスポーツ行動を大学進学時に継続するかないかという問題を考える時、友人や先輩、そして地域の人々の影響は特に大きいと考えられる。

### 3. 非継続の直接的原因

非継続群136名に対して求めた非継続の直接的原因の結果を、それぞれ項目別に示したのが図1である。「時間が拘束される」が最も多く、第1原因では13.2%，第1原因と第2原因の合計では37.5%が挙げている。次いで、「アルバイトでお金をためたい」「気力、情熱が消失」の順である。「時間」に関する項目を非継続の原因として挙げていることは、前述した過去のスポーツ条件に関する項目における調査結果との関連が考えられる。また、少なかった項目としては「先輩、後輩の関係が厳しい」が注目され、第1原因としてはまったく挙げられなかった。大学進学後の運動部集団に加入していないこととあわせ

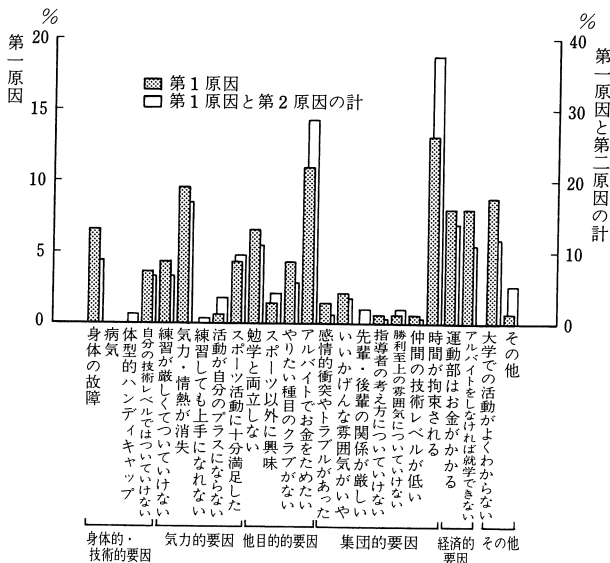


図1 大学進学時における運動部非継続の原因（項目別）

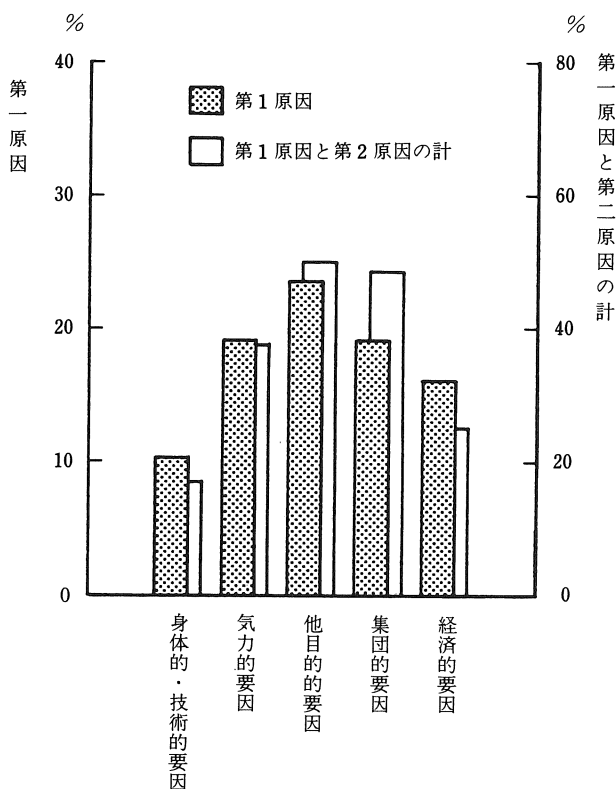


図2 大学進学時における運動部非継続の原因（要因別）

て、運動部の封建的集団というイメージはすでに薄いことが考えられる。

これらの原因を要因別にみると図2のとおりである。他目的的要因が最も多く、第1原因では全体の23.5%を占めた。最も少ない身体的・技術的要因を除いて、非継続の原因はさまざまな要因に分散していることがわかる。また、集团的要因のほとんどは「時間が拘束される」という項目で占められている点も注目される。さらに、気力的要因も比較的多く、中でも「気力・情熱が消失」の項目が多いことから、ここでも「バーンアウト現象」との関連が考えられる。井田ら<sup>1)</sup>による体育学部学生の中途での離脱原因の調査では、「身体の故障、



健康を損ねた」が最も多い原因である。要因別では、集団的要因が最も多く、気力的要因が最も少ないと報告している。本研究の結果と比較してみると、運動部を途中で退部する行動と、高校から大学への進学という節目で継続しないという行動では、その直接的原因にかなりの違いがあると思われる。

#### IV. ま と め

高校時代運動部に所属していた者が大学進学後に継続して所属するかどうかという点に注目し、その非継続の要因を明らかにしようとした。大学1年生男子学生531名に実施した調査結果を要約すると次のとおりである。

1. 全対象者中40.7%が高校時代運動部に所属していた。大学進学後の所属率は13.4%に減少しており、運動部離れを示した。
2. スポーツに対する意識およびスポーツ条件に関して、継続群と非継続群を比較してみると、いくつかの項目で有意差が認められた。
  - (1) スポーツに対する態度およびスポーツの効果に対する信念に関する項目では、両群の間にほとんど差はみられなかった。
  - (2) 規範信念に関する項目では、「友人」と「地域の人々」の期待に対する信念が継続群に比べて非継続群の方が薄いという傾向を示した。
  - (3) 過去のスポーツ条件では、子供のころの「時間」と高校時代の「場所・施設」および「時間」について非継続群の方が恵まれていたという意識を示した。
  - (4) 現在のスポーツ条件では、全項目で非継続群に比べて継続群が恵まれているという傾向を示した。
  - (5) 重要な他者に関する項目では、「友人・先輩」と「地域の人々」からの勧めが非継続群の方で弱いという傾向を示した。
3. 非継続群の直接的原因は、「時間が拘束される」、「アルバイトでお金をためたい」、「気力、情熱が消失」の順で多かった。要因別では、他目的的要因が最も多く、身体的・技術的要因が最も少なかった。

付記 以上のように主要な結果は要約されるが、スポーツ行動を運動部所属に限定している点、調査項目が過去や現在の活動の実態に言及していない点などさまざまな問題点があげられる。大学における運動部の問題を語る時、学生のスポーツ欲求の多様性、過去のスポーツ活動における問題点など、さまざまな視点からの研究を進めていくことが必要であろう。なお、本研究全般にわたり、福岡女子短期大学大浦隆陽講師には多大な御協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

## 文 献

- 1) 井田国敬, 河島英隆, 中大路哲, 鷹野健次: 運動部の中途離脱の研究 (1) ——その内部的契機——. 大阪体育大学紀要, 10; 1-11, 1979.
- 2) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄: スポーツ行動の予測因に関する研究 (1) ——社会的要因について——. 健康科学, 3; 55-69, 1981.
- 3) 桑野 豊, 池田 勝, 山口泰雄: パス解析によるスポーツ参与の分析. 筑波大学体育科学系紀要, 2; 23-30, 1979.
- 4) 佐伯聰夫: 転機に立つ運動部活動. 体育科教育, 36-3; 18-20, 1988.
- 5) 多々納秀雄, 金崎良三, 徳永幹雄, 橋本公雄: 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究 (2) ——社会的要因について——. 健康科学, 4; 51-76, 1982.
- 6) 徳永幹雄, 多々納秀雄, 橋本公雄, 金崎良三: スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (I) ——ランニング実施に対する Fishbein の行動予測式の適用——. 体育学研究, 25-3; 179-190, 1980.
- 7) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: スポーツ行動診断検査 (DISC. 1) の作成. 健康科学, 6; 113-127, 1984.